

青丘文庫研究会 月報

No.286

2016年11月7日

青丘文庫研究会 〒657-0064 神戸市灘区山田町 3-1-1 (公財)神戸学生青年センター内
TEL 078-851-2760 FAX 078-821-5878 <http://ksyc.jp/sb/> e-mail hida@ksyc.jp
①在日朝鮮人運動史研究会関西支部 (代表・飛田雄一)
②朝鮮近現代史研究会 (代表・水野直樹)
郵便振替<00970-0-68837 青丘文庫月報>年間購読料 3000 円
※ 他に、青丘文庫に寄付する図書を購入費として 2000 円/年をお願いします。

<巻頭エッセイ>

日本生まれの二年生 東京で見る「大阪ストーリー」

渡辺正恵

東京に転居して1年が過ぎた。関西からの積み残しの課題を抱え、静かに資料の整理をして余生を過ごそうと思ったが、1年も経つと好奇心がムクムクと頭をもたげてくる。

現在私の住むところは都内で最も区の境界が寄せ集まっている地域である。うちの住所は北区。お向かいが荒川区。三軒隣の銭湯も荒川区。西の大きい通りをはさむと文京区。歩いて7分ほどの昭和チックな商店街、谷中銀座は台東区だ。境界の道路で事故があると関係する区の警察が出動して、さてどっちの区に近かったのかと検証を行う。

上野に近いだけあって東北方面から来て長く住む人が多い。北区田端は大正の終わりから昭和の初めまで芥川龍之介を中心に文士村を形成していたが、関東大震災で焼け出された人々が住み着き芥川も亡くなり、街の様相を変えた。23区それも山手線の中とはいえ渋谷・新宿に代表されるあか抜けた都会の雰囲気とは全く違うローカルな雰囲気がある。

新住民を受け入れる土地柄があるのか、外国人がかなり多い。電柱の質屋の広告、教会の看板、美容室のメニューに当たり前のようにハングルが書かれている。大きな声で屈託なくおしゃべりしているのはたいてい東アジア系の若者で、見ても聞いても周りが日本人だけということはあまりない。

さて在日韓国・朝鮮人の軌跡を探さべく歩くと「道路拡張反対」「測量お断り」のチラシや幟がずらっと並ぶ通りがある。銭湯で聞きつけた「戦後の不法占拠」という場所がここではないかと推測される。計画的な道路でないことは、自動車道であるのに並行する道路が近すぎることや、先の見通せないくねくねした道路でわかる。ただ家並みは整頓されてそれなりの敷地を持つこぢんまりとした住居が立ち並んでいる。そのうちの軒には韓国名と日本名の表札が並んであがっている。ただし、このお宅では「道路反対」の表示は出していない。注意深く路地を歩くと、日本名の表札ではあるが多分在日の方であろう家が何軒か固まっているところもある。山手線を越えて30分ほど行くと昔の集落をしのばせるキムチの個人商店や焼肉屋さんが多い一角もある。

うちの夫は元々足立区千住の出身だがクラスには在日の生徒がおり、いわゆる朝鮮人部落の中にある同級生の家にしょっちゅう遊びに行っていたそうだ。中学高校が分かれてもほとんどの友人の進学先はわかるのに、あるときからその集落にいた子たちの消息がパタッと知れなくなっただらう。そんな話も気になる話である。

区の図書館でも地域の在日コリアンについての記述をまだ見つけられないでいる。

在日、鶴橋、パチンコ、金貸しなどのキーワード満載の「大阪ストーリー」を先日多摩市で見た。

20年ほど前第七藝術劇場で初めて見て、私が在日コリアンに関心を持つきっかけを作ってくれた作品だ。題名の由来を中田統一監督に伺うと小津安二郎の「東京物語」が頭にあつてということだった。「東京物語」も足立、荒川区が舞台だったのではなかろうか。ぼちぼちと活動して東京の在日コリアンの忘れられた記憶を掘り起こしたいものだ。

第304回朝鮮近現代史研究会 2016年6月12日

済州4・3事件に関する未体験世代の表象 —済州での予備的インタビュー調査— —玄善允

日本の植民地から解放されて間もない1948年に、韓国・済州で起こった大量殺戮事件である4・3事件、その評価は権威主義政治体制下で長らく強圧的に「暴動論」（共産主義者に扇動された民衆の暴動）一色だったが、その後の韓国民主化過程ではそれに対抗する「抗争論」（米軍政と新生韓国政府の暴圧に対する民衆の自発的異議申し立て）が台頭してからは両者が激しく対立する中で、やがて「民間人虐殺論」（無辜の民の被害を焦点化し、その救済や治癒の方策を模索）なども浮上するようになった。そして、事件から約50年後になってようやく「済州4・3事件真相糾明および犠牲者名誉回復に関する特別法」（2000年）が制定され、それに基づいて『済州4・3事件真相調査報告書』（以下では『報告書』と略記）が確定するとともに「国家権力の不当な行為」について大統領が公式に謝罪（2003年）、さらには事件勃発の日である4月3日が「4・3犠牲者追悼の日」に指定されるなど（2014年）、政府のお墨付きで長年の論争と対立に終止符が打たれたかに見えた。ところが実は、それらと前後しての政権交代などの情勢変化も相まって、またしても論争が激しく再燃し、せつかくの『報告書』も正史として安定した位置を確保しているとは言えない状況である。

したがって4・3事件に関連するあらゆる議論は、そうした論争・対立と無関係なはずはないのだが、本稿を第一歩として筆者が長いスパンで構想している「4・3に関する表象の研究」（以下では「本研究」とし、その一部に過ぎない試論である「本稿」と区別して用いる。なお、以下では括弧を外して、それぞれ、本研究、本稿と表記する）ではそうした議論から意識的に距離を取る。というのも、本研究は4・3をめぐる対立要因の最たるものである「真実」の糾明という方向を取らないし、どんなものであれ特定の立場や特定の個人、さらにはその言説を特権化する方向に進むつもりがないからである。本研究は、4・3事件の歴史的真相を探求するよりは、それが過去にどのように語られ、現在どのように語られているかを探求する。多様な4・3表象を「4・3の真実」というフィルターを介すことなく、とりあえずはそのままに受け入れたうえで、それがどういう要因で形成されたのかを考える。個人のものであれ集団のものであれ、表象一般もまた時代の趨勢や思潮、さらには表象主体の利害関係などから大きな影響を受ける。そこで、そうした影響関係を解きほぐしながら、表象個々のそれなりの「合理性」を明らかにするのが第一段階の目標である。そのうえで、そうした「合理的」な表象の多様な姿と4・3事件そのものを対照することで、4・3の現代的意味を探るとというのが、はるか彼方に待ち受けているはずの究極的な目標である。

因みに、先に触れた暴動論や抗争論その他の事件の位置づけの議論も表象の一つに他ならないのだが、それらは「4・3の真実」に収斂する、あるいは逆に、「あらかじめ想定された真実」から導き出された表象であり、本研究が対象とする多様性を本質とする表象の範疇には、少なくとも直接的には含まない。また、既に体験者の数々の貴重な証言が公刊されており、筆者自身もその種の証言を収集・分析したことがあり、それらも本研究の究極的な対象に含まれるが、本研究の第一歩に過ぎない本稿では、それらはひとまずさておいて、非体験者、その中でもさらに限定を施した未体験者と筆者が呼ぶ人々の事件表象の中に、事件の「残響」に耳を傾けるべく努めたい。

以上は、同じタイトルで『東アジア研究』65号（大阪経済法科大学アジア研究所、2016年3月）に掲

載された研究ノートの一部であり、それも含めた当日の発表全体の構成は以下のとおりである。

- 1章 はじめに—未体験者の事件表象と事件の残響—
- 2章 関連研究と用語の定義—事件の残響、非体験者、未体験者、未体験者の事件表象の間接性と創造性
- 3章 インタビュー内容の紹介—1960年代以降に済州に生まれ育った6人の女性の事例—
- 4章 インタビュー内容の分析・考察の(1)—4・3による被害、タブーとしての4・3、4・3との出会い、4・3表象もしくは4・3との付き合い方—
- 5章 インタビュー内容の分析・考察の(2)—文学的表象と未体験者の表象との関連—
- 6章 まとめにかえて—4・3表象の「民主化」を求めてのはるか長い道のり—

また、本発表に関連する拙稿は以下のとおりである。

- ①拙訳『戦争ごっこ』(岩波書店、2015年)
- ②拙訳『島の反乱』(同時代社、2016年)
- ③「日本におけるコリア系民俗宗教の変化の様相—ある中国朝鮮族女性の留学生活と「霊的な実践」の関係を中心に—」(東アジア研究第63号、2015年)
- ④「不就学女性の生活の中での「学び」—植民地下の朝鮮済州島で生まれ育った女性のライフストーリーと「学び」—」、独立行政法人日本学術振興会、平成23年度～平成25年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書、
- ⑤「詩はメシか?—『デンダレ』の前期と金時鐘—」、『論潮』6号、2014年1月
- ⑥「龍王宮から済州へ、そして再び龍王宮へ—済州に関する「常識」と「在日二世的信憑」と「村落共同体の構造」—」、『「龍王宮」の記憶を記録するために—済州出身女性たちの祈りの場』52-65、2011年

最後に本発表と関連する口頭発表は以下のとおりである。

科研：トランスナショナルな視座からの済州4・3文学の解明(研究代表者：姜信和)の分担研究者として、在日文学者の4・3表象を担当。その成果は以下の通り。

- (1) 玄吉彦の『真相報告書』批判について

(第1回 済州四・三文学研究会 「済州四・三研究の現況とその文学的表象の位置」

日時：2015年6月13日土曜日 13:30～17:40 場所：OIC 立命館大学大阪茨木キャンパス B棟研究会室2)

- (2) 済州の若い世代の四・三に関する経験と知識と考え—済州での予備的インタビュー調査結果—

(第2回 済州四・三文学研究会「トランスナショナルな空間における四・三史観の変遷—済州四・三文学との相関性の検討—」2015年10月17日土曜日 13:20～17:40、立命館大学大阪梅田キャンパス第7教室

以上の関連資料に関心を持たれた場合、次のアドレスに請求いただければ、可能な範囲で電子ファイルをお送りする。 sunyoonhyun@yahoo.co.jp 以上

在日朝鮮人史運動史研究会編『在日朝鮮人史研究』46号(2016.10、A5版、222頁)

<目次>

- * 「不正渡航」と渡航管理政策
——九二〇年代の釜山を中心に—— 福井譲
- * 一九四〇—四一年、大阪における李垠・方子
・ 玖の生活とその後の李玖の人生 塚崎昌之
- * 高暮ダムの歴史再読—戦前・戦中・解放後の
広島における在日朝鮮人史の交錯 呉仁済
- * 巢鴨事件—戦後の布施辰治と朝鮮人<<その2>>
川口祥子
- * 金嬉老公判対策委員会における民族的責任の思想の生成と葛藤—梶村秀樹の思想的関与を中心

に 山本興正 査から 西田知未
 ＊特別養護老人ホーム「故郷の家・京都」における 在日コリアンの高齢者—二〇一二年の生活実態調
 ＊在日コリアンの家計簿 李光宰

- 1) 在日朝鮮人運動史研究会関西部会会員の方（年会費 5000 円）の方には 3 冊、お送りしました。
- 2) 購入希望の方は、下記郵便振替で、代金 2000 円+送料 164 円=2164 円をご送金ください。入金確認後にお送りします。＜00970-0-68837 青丘文庫月報＞

●神戸学生青年センター・朝鮮史セミナー2017 著者が語るシリーズ＜全3回＞

＊第1回 2017年1月19日（木）午後7時～8時30分

「金達寿とその時代—文学・古代史・国家—」（2016年5月、図書出版クレイン）

大阪府立大学非常勤講師 廣瀬陽一さん

＊第2回 2月9日（木）午後7時～8時半

「われ、大統領を撃てり—在日韓国人青年・文世光と朴正熙狙撃事件—」（2016年10月、花伝社）

兵庫朝鮮関係研究会会員 高祐二（コ・ウイ）さん

第3回 2月23日（木）午後7時～8時半

「安重根と東洋平和論」（編著・李泰鎮+安重根ハルピン学会、監訳・勝村誠+安重根東洋平和論研究会）（2016年9月、日本評論社）

立命館政策科学部教員 勝村 誠さん

＊会場・主催：神戸学生青年センター

＜新刊案内＞

飛田雄一『心に刻み、石に刻む—在日コリアンと私』（三一書房、2016.11、四六判、255頁、1800円+税） 購入希望者は、1800円（送料込）を＜01150-4-43074 飛田雄一＞にご送金ください。ご入金確認後にお送りします。

●青丘文庫研究会のご案内●

■第306回朝鮮近現代史研究会

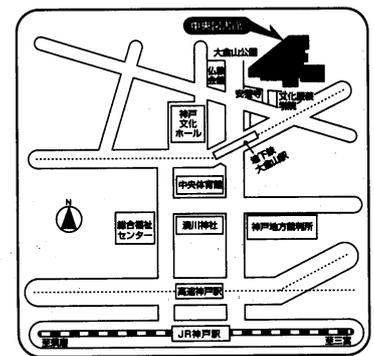
2016年11月13日（日）午後3時～5時

「革命と慰霊の空間

—北朝鮮における烈士陵・烈士墓の変遷— 水野直樹

■在日朝鮮人運動史研究会関西部会はお休みです。

※会場 青丘文庫（神戸市立中央図書館内、TEL 078-371-3351、新館3階で身分を証明するものだして入館証を受け取り4階会議室にお越しください。）



【今後の研究会の予定】 来月以降の予定。12月11日（日）在日（未定）、近現代史（姜健栄）。研究会は毎月第2日曜日です。報告希望者は、飛田または水野まで連絡ください。

【月報の巻頭エッセイの予定】 12月号以降は、池貞姫、張允植、横山篤夫、松田利彦、西村寿美子、玄善允、川口祥子。よろしくお願ひします。締め切りは前月の10日です。

【編集後記】 ■久しぶりの月報です。月報のお休みのときはメールニュースを送っています。希望者は、メールアドレスを飛田 hida@ksyc.jp までお知らせください。（飛田）